



吳談きうだん負おん種ひん博おく史だん記き

二編
 中



遠とほ三さん
 897
 5



明 遠 18
希 1897
5



笑談貧福軍記二編卷之中

浪華 一荷堂半水戯編

第五回 大船大夫勇戦して貧軍を破る

新で貧勢へ泰嘉冬面が力戦又さうも富るる

方も三陣具は敗走あり。崩きて立てぞ見えたる。係

まへ貧軍圖又の王て。今此二陣あり倒せば早大將

の旗本あり。黄金つらも。馬卵ハ金持あるぞお得

破き由断せると言々又呼りく貧卒をげやう。



貧福軍記二編

地震よりらりて萌き出る荒物鋪ぞ入るごらく。連木
味噌混火吹竹てんきよ得物を引さげて押寄くく
直立る第四の陣を見よとせば。福方此手の大将を
海部大船太夫積員まで濱蔵義然と建並白旗
あふで白塗小こま家々の印をつけ鳥毛の押寄の
臆骸川ぎとむるがへり。大将共日の出立よへ運らん
作の鑑又益須又◇形くるる魁と無支小着し。積
切丸と名附る大荷造りの太刀を帯。三百貫目の

重こある碇と小脇又のいこんで帆柱太た強馬又とん
あつんの鞍をかた味方の艦までぐて湖又むと一丸
貧軍を追風のぬくを待ごぐ。早も長者の備を
たろ航せぬらてまらけり。新と入るより貧方も
霍翼あらで強慾の備を面又あらりて。四陣を目楸
つこの海大船太夫こせとて自真先又馬と飛し。
勝やこつろ貧勢小面もふらぎを割て入大音上又呼
るハ遠た者ハ儀と女浪の音よむさけ。近くばよつろ

船をよ我こそハ福留方の大廻一。番船一とよびせ
 くる海部大船大夫積目見あり。かくる吾が碇の目不
 共食面さち破り。みらくよ沈くよとんとこの
 大碇さかるべと振回一はく食軍よ表も曲を業
 こんぎ真一文字よのけ走さば。この大碇の先よのけ
 らと討る食將のづと知らば。係さば先勢備と
 礼。後の方へあごさくるを得たりや。應と積目へ
 勝十分の帆をまたく。味方の水主やのりたふまで。

をげしは追風の下知をつて。者どもさやあきさえ
 よ吾がこの碇さたよ可きして。敵はがりくまのり。梶ぞ
 べら帆をならざる。其先よ本陣までも乗こんで。敵の大
 将爰好を止め。首を残りどとり梶せよ。尚も碇をた
 りく。當るを幸ひのけちらし。この順風又走る如
 く。浪を蹴立てたくりさび。こりものぶとれ食性し。
 船手又取引あることあり。大軍一同又乱さ。ち
 ちや肩色と見えるところ。食方四陣の大將。自時無

三四守成面垢と煮しめと直垂又一まい着ころしの
 甲と年中着るし。人品あり毛の動又股が重。貧
 想院のごま鎗とたづさへうろくへ回る味くよの女を
 一人と小立とごまり勢ひさるどた敵さふせだ。あらいを
 ころしとえ。又ハ突ふせ。這首をせんとぞ。戦ふ内。大船太
 夫積員へりくとえるより。碇をらげて。走来り。アア小立
 マくまり其ごまよて人交りこそ。撒怪あり。イデ福つん
 の鉄の味。食してム生人とあつるを。成面くら得

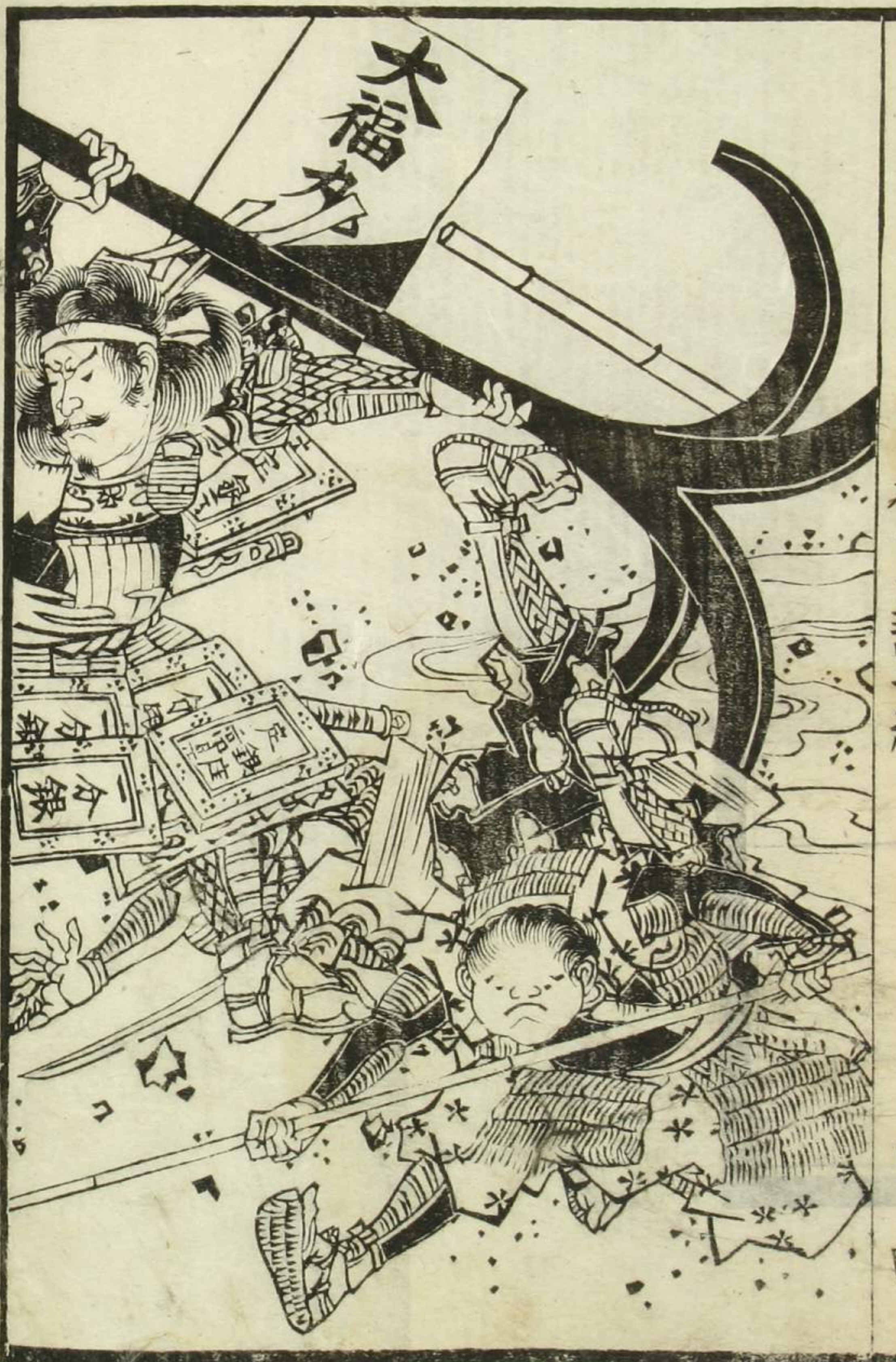
億とるいろあり。憎と羨垣め玄界又難目と走てまひる
 との抑あふやとのことやめる。若が越る荒磯より。未
 越がこれ晦日の瀬戸まで。一文あり小懸倒し。難ふと
 こころ渡つる。貧想院の手煉の鎗先見せて難
 船させる上その印首を荷うちり。帆柱さつろく
 くらきんごとと突く。のまご積員も心得り。と身さる
 ころ。日頂の大力十倍して碇を自由又戦ふさぬ。童
 子が羽根をつくごとく。或ハ高く又ハ底く。一二十か二

うらたの人の
海辺方におま
たのいふ方、お
しと食方と
いふ



風雲録 四二巻

中八五



風雲録 四二巻

中八五

十や三十合。丁度丁百。百戦の秘術をつくして渡り
何のちのき兵鎗もろとも不。微塵もあらずしてくま
りのと力おまうしてあぐるる。無三四守成面も鎗先
とるどぐ抜回り。十変万化とをさうらほど何糸是ふ
敵をべさす。すでよ危くあるところ。自時成面の島等ま
古菰間藤太。貨種内記。原級治郎。微日利難十郎。
古居増蔵。五人の野郎無茶走つけて。猛り回り
積員を中にとりこめ討ぐる。積員眼みいりてを

あらへ。シヤ面倒る。這虫女といふ。この件は碇をかり
上五人を相手ふこととむせど。火花をちらりして戦ふうち。
何のきむべ。古菰間藤太のの大碇をうけせん。ト。
其後大地へ行たふ。菰間藤太よりきて失ふ。残る四人
ハこそよかまへど。唯逆上またりと敵ハ名も肩も江戸
回船。二を争ふ。勢あき。百や二百又さうつまる。今
日暮しの貧持が。いろやど勇さふる。あともさうら。怨
る。氣色あく。右又みだり立た。又跳うへ。殺まんの

金高積こんぐ一う罰りの海上をさらうを吹て利潤
 せ見る。その大丈夫の身代るせば前又さきこ一貨種
 内記貨札くさき一鎧の上帯引うけるがらエイヤ
 とえねきべ身體宙よとをさきて置くる貨の詰ど
 して重さいりの利をうけて俵の川ある水中へ落ちて
 流き出さるり。此あまさま小氣あてきしていとど
 精のあと原紬治郎。ふげんとさきど脚腰たぎ止
 くいさ積員の且又喰付居り一さめんどら

ありとるうへせバウンと一色なげふとんへが後へよる
 まく腹の中。空しく喫せ止める。とて又三人討まじ
 より。残る二人の如何又せん。たむむくと難十郎。
 アフふそろいと古居増蔵。俄又神風を病る如く。
 得物をそがま取落し。上向るぬ又西人ひとしく。
 將碁倒しふたふさき。同く馬鹿死まさりけり。
 既又五人の昂等討まじ自時無三四守成面へいまい
 いらにも可ハトと一目三又逃びとせ積員三男を氣弥

集福言言二集

中六

まゝして退さどりのと風を起し。尻又帆のけて追
 うこまば是又氣を得て福方の嚮又敗せし諸將の
 軍勢一同又とつと取くくし。惣軍一時又起り立等ひ
 破行又責りまきばさし根づよた貧方も大船本夫が
 勇力おのけ立らきて敵しぐく本陣さして敗走
 るせば大將難中者甚好公の怒と共に諸軍をえげま
 し。喰志のぐんと仕さまへと斯貧窮の場所より
 味方の厄介のりてへ免ても用てもこらへぐく。兵に

そるを乱さんとして係るところは大将の旗本等
 中よりの人品するは狼無茶一人はぐくと何らひいで
 大音上く喚るるハヤア云のいもあは味方のむん卒
 たとへいりやと元銀ふとた船持とてむたむり。いさ
 近長者といひてふらんや。今又續て難船させ貧
 の懸計は搦とて裏店又逼塞さしと人斯ま
 吾の貧方もて狼無茶と呼きける家賤賣九郎安
 具あり。イデー勝負してゐ兵人と吾先祖よりつて

集福軍記二編

中ノ七

くる年浪切の旧證文无利のメ高三十六貫五百目
 の錢棒をらで減法をふり回しつ躰出よれ敵わふ
 引當は借倒さんといふまのふ勝やこつるぬく方ふ
 ありるを辛ひんせ回せど。福者へ如何でか相手は成
 べき反古又公と一た古證文味々こ又請てハ損失多
 一寄る子つる子とく外よと左右さつと道を開さ
 直切る者さへるりりくつば賣九郎へみさおしつよく
 無二無三こ又さく廻回し彼證文のメ高は是非せん

銀失の借らんと思へど實行せば一割でものつてやらん
 と眼を配り。夫ふりく立むくへ福方の陣中より慾
 面一方齋厚良と名乗安物買ふて鼻かとりの鎧小
 くは鷹鳥の前立物。うつる甲と着し股の裂るる鎗
 を引さげ這奴一番見例し直ざり殺して買取て
 借人を活して物又せんと安具又うけて抵合へ賣九
 郎へいこ立ちまぢ儲る相手あさば心のうらち又笑せ
 めくこ。ハテ借徳又仕てくせんごとと彼證文をふり上る。

金貨福軍言二編

中ノ十

両人（りうじん）まけよ負（まけ）まどと争（あざむ）ひ数刻（すうこく）又かよびしど未（いま）ど
 勝負（かちまけ）のけりぐとて。彼方（かた）へ百日の内よりたへば這方（こた）
 へ立両の内へ引ど。どが又慾面（よくづ）引をまて。あま手ひ
 どくたふりち賣九郎（うり）の心いらぐて。直（ただ）るままらて
 諺（ことわざ）の。金具（かねぐ）をどがつて忽（たちま）らへ。ウと云（い）ふ手と女
 りくまバ。股（また）の裂（さ）る鎗（やり）ともよ。今へがつたと折（お）あいて。
 賣九郎（うり）へ立上り。最早（もはや）はうい是（こゝ）迄あり。勝（かち）手（て）よこい但（た）
 志（こゝろ）とまこと。彼證文（かたあかし）をあげりて。味（あじ）この陣（ちん）へ懸入（か）

りる。仕（つか）とぬしりて一方（いつぱう）齋鬼（さいき）の首（くび）を取（と）る如（ごと）く。
 お一載（いつざい）て證文（あかし）を懐（か）中（ちゆう）ちりてしり立（た）有（あ）いりら
 てぞまひりぞたひり。

（作者）目録（もくろく）のち慾面（よくづ）一方（いつぱう）齊（さい）の證文（あかし）當名（あな）の借全（かりぜん）
 又（また）捧（た）を以（も）て佐位（さゐ）ちる。高利（こうり）の手（て）がらを為（な）
 んものと種々（しゆしゆ）豆（まめ）勞（らう）を費（つ）やせ。一（ひと）が嚮（さ）のあり手（て）
 の住所（ぢゆうしよ）も志（こゝろ）とまて其上（そのかみ）全（ぜん）限遇（げんぐ）しむ。何（なん）の
 やくよめ立（た）とて若（わ）子（こ）金子（かねこ）を損（そん）亡（ぼう）させ無（な）

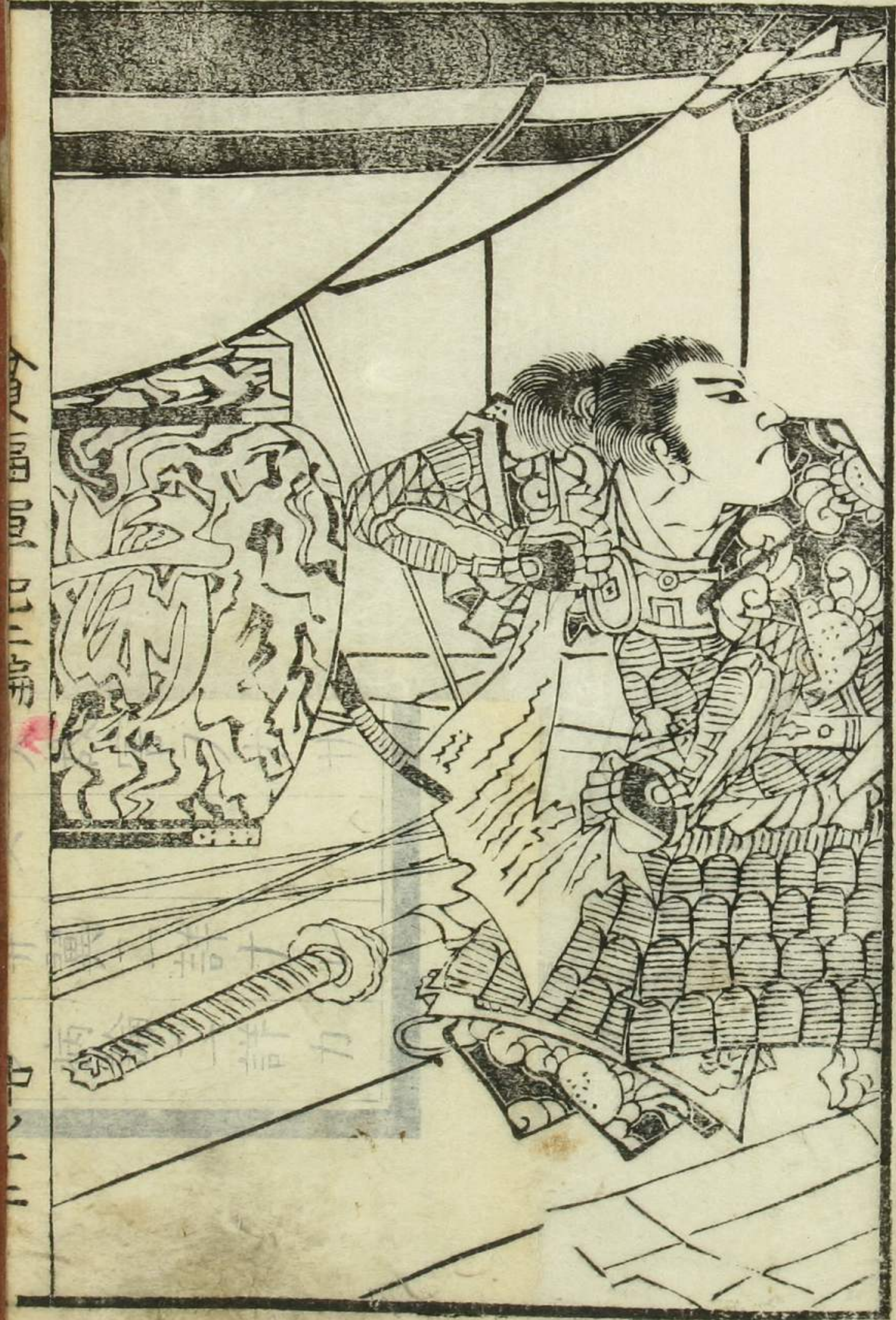
徳川御成敗式目

中

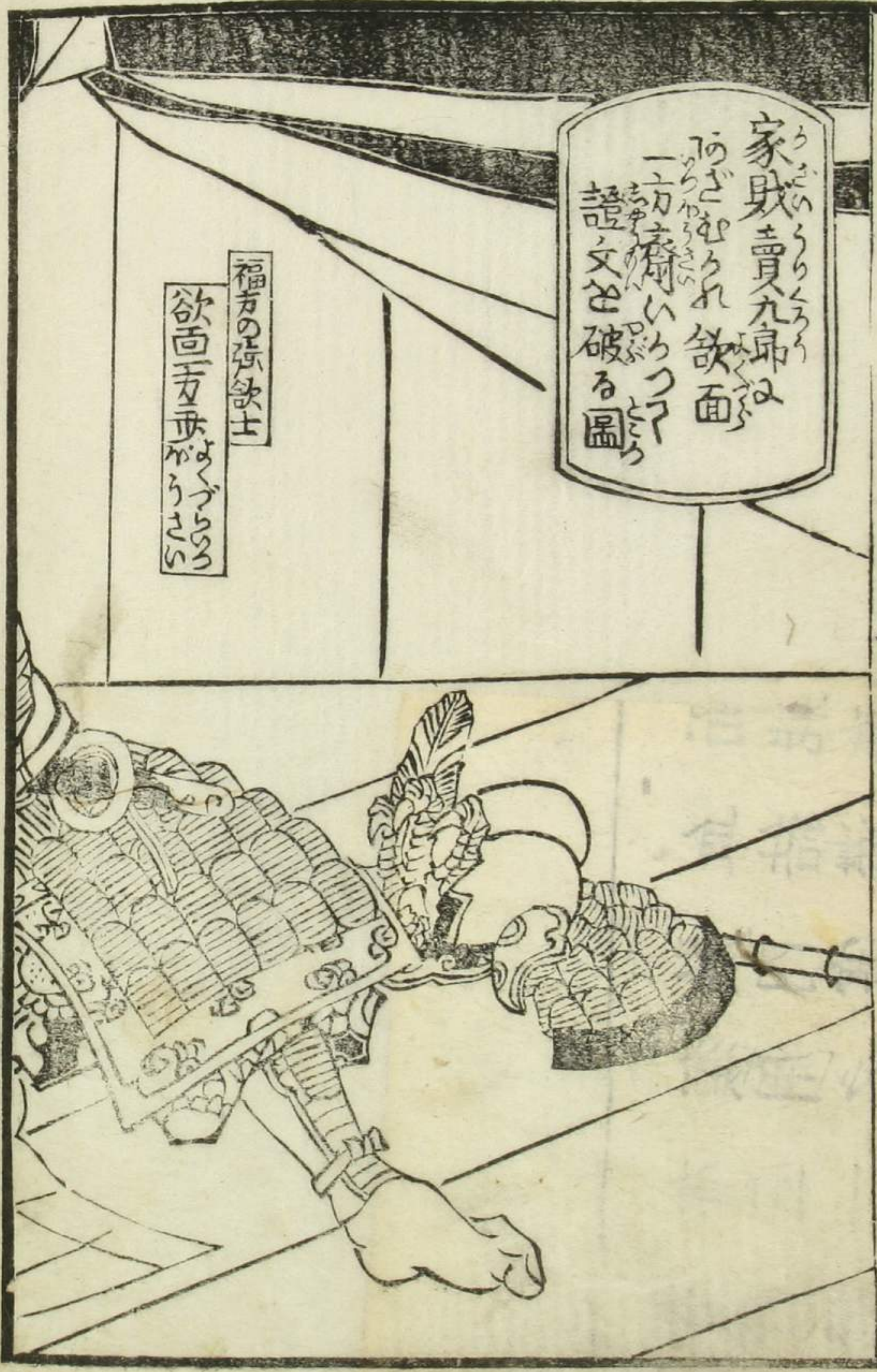
念の齒がとせりしあがら。終に證文引きたて。
手ふた紙又仕りしとぞ。○元金を以て不正路ある高利を得んと。慾此
のたりを知らざる時の係るたれしふ合人
ありあり。よししく慎たまへ。○一方齋の更
情下の條は物語ありし。

係るところは福方の大軍帥。田有志満守金鳥と
不慮味方四陣の大將海部大船大夫が勇力にて一度

ハ貧軍破るといふと余り深入る時ハ奸智又長
貧軍帥ニ面將監成安がいろいろある奇計をみこん
まどぎ。且ハこの日も没果て早黄昏とありし。バ
たがい夜軍無用あり。一先いふとせよと久人と諸
將又このよし陣觸を。引鐘うらて相圖をみせハ
貧方あるとく太鼓をうち。今の夜軍益をいとて。
相引よこそありし。去程よこの夜福方の惣大
將福留平又金持卿ハ軍帥を始に諸將をよるた。



福方の強欲士



家賊賣九郎又
あざむくれ欲面
一かきつり
証文と破る圖

福方の強欲士
欲面五郎

福方の強欲士

軍の次第を聞きこし免まし。海部積員つみぐみが働たせ按おへん
 とて賞せう員いんたたまたまひ尚なほ亦また諸しよ臣しん又また仰おほるるハハ此こ度どの貪ひん
 軍かを今日けふ一いつ戦せん又また滅めつ亡わうさせん。とたたママとく思おもひ居いり
 一ひと又また係けるる志しぶぶとた貪ひん性せい又また正せい道だう又またたたりりの爲ためとたを。
 いいつつり勝かち敗まひ交まじるる期きををし。尚なほこのちの合くわ戦せん又またハ。
 国くに有あり金かね爲ための智ち略りやくをを以もつて唯ただ困こららしし又またここままららしして上う
 困こ窮きゆうさせんんハ如何いか又またと仰おほるる又また金かね爲ため諸しよ將しやう又また向むかひ今いま昔むかし
 君きみの御ご意いあるるごとく。瘦マヒ貪ひん又またとハ申まをおおがらららるるままく

るるらぬらぬふふの手て舍あせ始はじめめごとた勢いきいいてハ積つみ員ぐみをを
 とと又またへへかど味あじをを充ちくくありりりりと積つみ員ぐみどどの勇ゆう
 戦せん又また敵てきの棋き本ほん切き崩くづし勝利せうりハ福ふく者しや又またあるるといいふ。
 雜ざ費ひ損そん失しつ多たくくして倒たの回まわるるももととくくああららぬぬたたハ
 又また某その愚ぐ案あんをを以もつて今いま一いつ計けいををかかととここ一いつ々々家け請せう小せう家け
 まで引ひととららせせごと掌ての手うへへととよよりりも安やすし。ととままととままて
 斯かくるるしてハ冗ちゆうのち味あじ方かたの徳とくももああららせせと是こゝをを以もつて
 くる時ときハ強ちゆうくくたたりりの好このむむして唯ただこの終しゆう又また對たい陣じんををし。

敵寄よせらしてしらば手びく断ことわり日数重ひかずはて居るうちも
味あじのへ諸雜實しよざつじついとゆいど敵てんの兵糧ひやうりやう又手づつ入て。兩
露ろとへ回る期とたをむづさば大軍たいぐん一同又責立てたふるべ忽ち滅
亡がううごひあし。あごど如何いかう又と申りせば一統いつとう其意そのい又
感かん伏ぶくあし。谷おのく陣ぢんくあごく守り敵てんの英氣えいきせうかひ
る。是首こ又亦また負方おのの軍帥ぐんしゆ二面將にめんしやう監成安けんじやうあんへこの夜
本陣ほんぢん又諸將しよしやうとあつ免めん疑ぎあで上あがる云いるへ今日こんにちのうつ
せん既すで又味方あほう危あぶるところ。敵てんよと軍ぐんを引あげん。

是このふらぎ。田有たう金鳥きんたうの軍配ぐんぱい又て某愚意たふろしを回まわと
とたへ即すなはちあるよの敵てん又味方あほうの虚弱きじやくのあごをさごむと
翌あつよりこの後あつ對陣たいぢんる一置かたたぐらうら又数日たすひを重かさの
負者おのの勇氣ゆうきせう一あるへせ其虚そのあ又のつて責寄せめよせへ
彼あつうこ不相連そらひる一斯かくてハ雜用ざつようたをさとありけ上
難あづ流ぢうあるさんこと三百目あつめ采喰さいじゆくふよりのへなごど難面あづらと
負おのまの目めづまり。係かひせバのう追おこの場所ばしよ又瘦骨張しゆこちやうて
對陣たいぢんせんより。むと先本城せんほんぢやう又引ひこり敵てんの様子ようしよをさ

敵寄らしてしらば手びく断日数重はて居るうちも

味のへ諸雜實いとゆいど敵の兵糧又手づつ入て。兩

上其むららの妙計をば。是を収て彼を謀り。
 福者よ内乱かこそせて其期又臨む。戦ふさば金持に
 をとら必定せり。何とせよこの議いふとや。と言ふ事を
 云んぞ申せしむ。是をたと同。敵はま
 さと夜のうちよ。おそろふこの場を引とせ。と一
 合してこそくと夜技仕制と食持るまばさ。も
 連す。陣を一夜の内又引拂ひるるも。身内小
 倉守膿盛吉井入道遍亭齊と敵をたのまふり

させ借錢城へと引とまらる。扱兵翌日又いり。福が
 陣より是をさるふ。宵の景色又引く。旗馬印も
 何らばこそ陣小家や下もとりた。唯嘯くこゑ
 野原とあり。跡に残るの武具るらで。破は指を竹の
 へ。徒繩切桶の底煤帯とらんと其跡又。裏の塵芥
 場ふるごとく。用又立りの一ツもあ。共有さぬ又何れ
 果一同又どんと笑ひる。係さば家小用を。と
 陣所を引をら。金持卿の諸軍をまご。前後を乱

さぞ志づくと歡樂城へと入るまふ。尚又貧乏大
 軍師。二面持監成安ハその後借鏡城ニ在てふく
 者せんとぞ借倒一。味方の融通又せんものと。
 昼夜智界を先ぐらせ一。不斗一計を案ト
 出まて其手ごんハ此將監が甥ある者ハ街髪結之
 丞助成とて頗る美男と呼ばし一。うへ世古又の諸
 常 げいへ行こり。未ど前髪の頃より。日に出職の
 役せつと先彼福富の老臣なる。廣井氣能守自月

吉の語をえト先領内を年中入込こまけるこそ幸
 のまこ苦肉の謀をこづけ。首尾よく支をかこのみ
 るまこ味く赤目を釣きて多くの金を倒さん
 こと。何より収ていと易一。とむそりふこのこと大將
 の御前よいで言上る一。且結之丞助成とこの城
 中一。おまひうんと敵お知しての悪のへ一。とその
 身ハ三をらくいとまをたひ借鏡城を出立してある
 つく當らぬ其時ハ不漸用意の隠すと山子の

入る當らぬ其時ハ不漸用意の隠すと山子の

コノ事ハ

里へとあるとある。畢のつ見みこの後將監のちが如何いかにある計けい
畧りやくをくらまそう。その亦また次の編まはとて。作者さくしやの意向こうじやうを
聴きひり。エヘン

笑談貧福軍記三編卷之中終

